

山川登美子の歌(3):初期投稿歌、『恋衣』以後の『明星』掲載歌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越野, 格 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/2405

山川登美子の歌(3) — 初期投稿歌、『恋衣』以後の『明星』掲載歌 —

越 野 格

前稿に引き続き、山川登美子の全歌の通釈をめざして現代語訳を続ける。今回は『新声』に発表された十八首(219～236)、『文庫』の七首(117 132 237～241)、『小天地』の二十七首(86 242～267)、『関西文学』の二十六首(45 117 145 268～290)、『新潮』の十三首(291～303)、『大阪毎日新聞』の四首(304～307)を現代語訳した。尚、『明星』などに掲載され、既に現代語訳を試みた歌も、便宜上、先の通し番号で元の歌群に加えた。その場合は初出形で訳した。

これらの歌は、明治三十年十二月から三十三年十一月の間に投稿・発表されたもので、登美子の最初期の歌群である。通し番号は『山川登美子全集上巻』(文泉堂出版 平6・1)に拠る。以下の歌番号もこれに拠った。

続いて『恋衣』(明38・1)以後の『明星』掲載歌を訳した。「花がくれ」(明38・2) 十二首(308～319)、『新詩社詠草』(明39・1) 十一首(320～330)、『新詩社詠草』(明39・5) 十八首(331～348)、『新詩社詠草』(明40・2) 十首(349～358)、『新詩社詠草』(明40・

3) 十二首(359～370)、『新詩社詠草』(明40・5) 十首(371～380)、『新詩社詠草』(明40・6) 十二首(381～392)、『雪の日』(明41・4) 十八首(393～410)、『日蔭草』(明41・5) 十四首(411～424)である。

以上、『恋衣』刊行以後『明星』に発表された、登美子晩年の歌は、計一一七首である。この中「花がくれ」十二首中八首は、『恋衣』の二版、三版に採録されたもので、前々稿で、初版の歌に並べて既に現代語訳を示した。今回はその時の訳を基本的に載せたが、字数の関係で一部手直ししたものもある

通釈の基本は、前稿でも述べた通りである。即ち、登美子の歌を「現実離れの歌」とし、写実主義的、現実主義的、或いはモデル論索的なアプローチからは、ひとまず距離を置くこと。あくまで「ぼうず」の歌、「こしらえもの」「観念」的な歌として、その構想、構図を考へること。言葉の並び、連語が「出まかせ調」で、「考へることの先に、作つてか、つてある」ので、下の句、最後の一段での急速な整頓、纏め上げに注意をして「魂を捉へる」ようにして現代

語訳すること、などである。ただ、詞書、添書的なものがある場合はこの限りではない。孰れにしてもこれらは私の心構えであって、実際は訳文に苦慮し、とりあえずの通釈も多い。

また、意識にしても逐語訳にしても、出来るだけ簡潔な現代語訳を心掛け、五十七字以内に収めるよう苦心した。五十七字以内とは、レイアウト上、訳文を二行に収める、との物理的な理由からでもあった。

(1) 『新声』『文庫』『小天地』『関西文学』

『新潮』『大阪毎日新聞』掲載歌

219 山里の柿の木の梢に微かに霜が降りたのが見えます。秋の暮れ方の風はいかにも寒々しい。
〔暮秋〕(『新声』第三卷第六号、明30・12)

220 遠山の木立がまばらに透き、積もっている雪が見えます。小賣巻を挙げてこの景色を眺める人もいるでしょうか。
〔遠山雪〕(『新声』第四卷第二号、明31・2)

221 咲き匂う花々も霞に覆われ、春の野辺はあたたかも美しい錦模様のようにです。
〔春野〕(『新声』第四卷第五号、明31・5)

222 幾重にも湧き上がる霞の中を歩き続け、夕暮れ方、春の花でいっぱい野原に仮寝することにしました。
〔春旅〕(『新声』第四卷第六号、明31・6)

223 世を捨てて山に入った人はさぞ恋い慕うでしょう、深山の月の下で啼くホトトギスの声を。
〔杜鵑卯花〕(『新声』第五卷第一号、明31・7)

224 巧みな画家の筆であっても到底描くことができない眺めです。と。あたり一面を暗くして峰に夕立が降っています。
〔夕立〕(『新声』第五卷第三号、明31・9)

225 芭蕉の葉に寂しい音をたてて時雨が降り出しました。雨の中の虫の声はむせび泣くようです。
〔雨中山〕(『新声』第五卷第五号、明31・11)

226 すつくと立った貴女の姿が懐かしく思い出されます。その姿は千草の中に咲いている姫百合のようでした。
〔井上清子の君へ〕(同)

227 音もなく徒らにこの世に打ち寄せる荒波。その岸辺に私と同じ惨めなあなたの姿を見ようとは思いませんでした。
〔汐たれ衣を讀みて〕(同)

228 花影の下で夜通し鳴き続けた鈴虫の涙なのでしょうか、萩の下草に置くあの白露は。
〔萩露〕(『新声』第五卷第六号、明31・12)

229 故郷を懐かしく思う一心で越えて来ました、狼の音が聞こえるあの木曾の夜の山道を。
〔夜帰郷〕(『新声』第一編第二号、明32・2)

230 春の歌の中に(花の雫)(『新声』第一編第五号、明32・4)花を摘んで家路を一心に急ぐ乙女子。花で一杯になったその袖

の香を慕って、春の夕風が追いかけます。

231 「春詠（十二首）」〔『新声』第二編第六号、明32・5〕
糸を紡ぎながら歌う媼の唄も長閑に聞こえます。霞の中、山里は咲き匂う花々で溢れています。

232 「夏の歌の中に（野菊集）」〔『新声』第二編第四号、明32・10〕
蝙蝠の飛び過ぎる軒端もたそがれて夕月が白くかかる。薄暗がりの中、紫陽花の花が浮かび上がります。

233 「近詠の中に」〔『新声』第三編第一号、明33・1〕
指さして何を語るのでしょうか、幼子が手折った小萩を母親に差し上げながら。

234 「新声」第三編第七号、明33・6
欄干に寄って貴方はなおもこちらをご覧になっているでしょうか。私の乗った船は段々遠ざかって行きます。

132 「新声」第四編第一号、明33・7
鳥籠を小枝に掛けた少女が、咲き始めた梅の花数を数えては微笑んでいます。

235 「新声」第四編第二号、明33・8
百合の香りをいつの間にかいだのでしょうか、私はまどろんでしまいました。道理でその見た夢はなんとも気高いものでした。

236 心に思い浮かぶまま、私はただ徒らに砂に書いて浪が消すのに任せました。折から夕方の浜辺には千鳥が鳴いていました。

「浦春」〔『文庫』第九卷第二号、明31・4〕

237 海に立つ波を霞の合間より花と見立てて、この浦にも春がようやくやって来た、と海士は言うのでしょうか。

238 「水上落花」〔『文庫』第九卷第六号、明31・6〕
春が来たので水面にも桜の花が浮かび、岸辺の小草も咲き匂っています。

239 「古郷月」〔『文庫』第十二卷第二号、明32・5〕
古郷の家の荒れ果てた軒端に、月に照らされて咲く忍草。その忍草のように乱れたこの心はどうしたらいいのでしょうか。

240 「春の歌の中に」〔『文庫』第十四卷第六号、明33・5〕
鋏を休めて絵にでも描きたい、と思うほどの山の美しさ。その山陰に立つ花々の中の伏屋こそ、私の家なのです。

132 鳥籠を小枝に掛けた少女が、長いひなか中、咲き始めた桃の花の数を何度も何度も数えています。

241 「新星会近詠」〔『文庫』第十五卷第六号、明33・10〕
旅人が脚絆を締め直して渡る大和川。その清き流れの中に歌の聲が聞こえます。

117 偽りで濁った私の涙がこの袖にかかるならば、これを絶ち切り再び貴方にお会いしなもりです。私の涙は真実の涙です。

242 「簪草」〔『小天地』第一卷第一号、明33・10〕
流れてきた花束が美しかったので掬い上げたのですが、それを結んだ人の名が知れて、驚き震えて落としてしまいました。

243 うたた寝していた私の手にいつの間にか花を持たせ、貴方は微

笑みながら絵に描いていました。

244 永遠に湧き続ける泉の水を汲みなさい、との、この世ならぬ歌神の声。それは夢、いいえ、本当にお聞きしたのでした。

245 私は露を滴らせる花々を踏みしだいてさ迷い歩き、踵はそぼ濡れ、独り物思いに耽るのでした。

246 届いたのは私の大好きな花でしたが、結んであった歌には名がありませんでしたので、髪に挿すことは出来ませんでした。

247 桜の木々に隠れて吹く貴方の笛の音が余りに哀しく聞こえませんでしたので、私は膝がわなないて樹に縋り寄ったのでした。

248 聖書を読みながら独り泣くという貴女。その涙こそ百合に置く露のように清いものです。

249 私に拭わせてください、汚れに染まらない、その貴女の涙を。私の手のひらが濡れることはとても名誉なことに思います。

250 白蓮の蕾を折り取って頬に寄せ、その蕾に籠もる香りをかいでいる前髪の貴女。その貴女の何と美しいこと。

〔新詩社詠草〕(『小天地』第一卷第二号、明33・11)

86 遊び心で路傍の糸柳の葉を繋ぎ合わせて置いたところ、誰がしたのでしょいか、その上の葉をさらに結んでありました。

251 薄紅の芙蓉の花弁で露を包み、出来るならば女神の髪に注ぎたいのです。

252 姉君の鬢のほつれを掻き揚げながら恋歌を口ずさむあの方は、何と憎らしい方でしょうか。

253 筆を嘯みつつ歌作に苦む私の額に、貴方は花の露を振りかけ

悪戯するのでした。

254 なまじつか私が貴女の憂いを問いつめたばかりに、また貴女の白い手で涙を拭かせてしまいました。

255 あの事があってから三年が経ち、今年も秋が来ました。私は秘めておいた貴方の歌を躊躇しながらも水に浸してみました。

256 貴方を想い侘びながら、摘み散らかした薔薇の花。しかし、それを踏みにじるには余りに心弱い私でした。

257 足許に付きまとう日頃可愛がっていた犬も追い払って、私は家を出ました。独り花野で泣こうとしたのです。

258 私のことであなたをお泣かせしたことをお許しください。弱い女の身に、今秋の日が暮れようとしています。

259 鶴の子の羽衣を借りて星の世界に上った私でしたが、そこは私には似つかわしくなく、との無念さがありました。

260 紫に縁に高く輝く星とばかり見ていた天の入口でしたが、そこに吹く明け方の風は寒く厳しいものでした。

261 ただ美しいとばかり眺めましょう、黄雲、白雲、紫雲が空高く浮かんでいる時には。

262 涙で手枕が冷たくなって夢から覚めた。どんな夢、とは聞かないで。私も言いません。折から花を濡らして雨が降っています。

263 そつと軽くお袖を捉えて、貴方に御歌を所望しました。難波で見た夢のなんと美しかったことでしょうか。

264 瘦せた私の頬に花の香りをさせるのはひどい仕打ちです。難波

の春の風よ、どうぞ私に吹き寄せないで。

265 岩に当って小百合の花を打ち砕きました。世の中というものがこのように惨いものと、初めて知らされた今日、この日に。

266 私の聞き違いでしょうか、どなたかが秋の曲を歌っていらつしやる。霜の置く朝にその声はこだましています。

267 目を閉じて胸元を掻き合わせて私は長い間待ち続けています。いらしゃってください、いらつしやって、貴方のまぼろしよ。

「高師の浜」〔関西文学〕第二号、明33・9

268 大和川は昔見た夢の中の景色に似ている、と歌った方。その方が今この場にいらつしやったならば、と私は切に思います。

269 女の身ではしたくない、と誰方かがお思いいなつたとしても、私はこのお仲間から漏れたくはない、と強く思います。

270 松の木の多い高師の浜、その真砂路に私の拙い歌反故を埋めて立ち去りましょう。

271 畏れ多くも人の世に置いておくような歌ではない、と女神が雲に乗って取りにいらつしやる、それほどのすばらしい歌。

145 薪を背負い町の市に出掛けた私でしたが、市人の冷たい笑いに耐えかねて、薪も売らず米も買わずに村に帰って来ました。

272 蛇さえも慕い寄るといふ貴方の笛の音。この浜風の吹く中、ぜひ一節でもお聞きしたいものです。

273 この打ち寄せる荒波の調べに合わせるすが私にはありません、私の胸の小琴は余りにもおとなしいので。

「新星会詠草」〔関西文学〕第二号、明33・9

274 ご覧になりませんでしたか、あなたが燃えるような唇をお付けになったので、その白蓮から露が湧き出でて来たのを。

275 兄上様、とお呼びすることを神様はお咎めするでしょうか。神様がお遣わしになった、その星の愛子をお呼びするのに。

117 偽りで濁った私の涙がこの袖にかかるならば、これを絶ち切り再び貴方とお会いしなもりです。私の涙は真実の涙です。

276 星の光の下、蓮の葉に置く露を見比べていると、何とはなしに笑みがこぼれるのでした。

277 行き違う私を呼び止めて、傍らの萩の花を折ってくださいました、名も知らぬ方でしたが。

45 私たちは神様から美しい玉で飾られた沢山の小琴を賜りました。さあ、打ち集い合奏して芸術の神を讃えましょう。

278 想い焦がれた人に嫁ぐ私の友。その花嫁姿を馬に乗せ轡を執っていく我身を思つて、私の心は穏やかではありませんでした。

「新星会詠草」〔関西文学〕第三号、明33・10

279 人目を避けて蛇の目傘を深く傾けて小径を急ぐ私に、態としようか、人がものを問い掛けるのでした。

280 乱れた髪を口に噛み、手を胸に合わせている少女の姿。お嬢さん、あなたは何に傷悴しているのですか。

281 貴方、縫針の運びが遅れ勝ちなのはなぜ、とお尋ねにならないでください。指に針を刺しても血も出ない私なのですから。

282 萩の花が咲きこぼれてしまった朝の庭。私は昨夜来の虫の音が

残る小草の露を踏んでみました。

283 ちよとした悪戯で池に小石を投げ込んだ私でしたが、なかなか消えぬ波紋を見て物思いに沈んで行きました。

〔新屋会詠草〕〔関西文学〕第四号、明33・11

284 私ではないわ、と冗談めかして裂きました。いつの間に貴方のお手に入ったのかしら、そのとんでもない私の歌反故が。

285 私に囁く貴方の熱い唇が何度も触れたので、貴方のお言葉が聞き取れぬほど私の耳は真赤になりました。

286 私の取り留めない悪戯書きを、いつの間にか隣の猫が喰わえて行っていました。

287 泣くまいと嘸んでいた小絹は引き裂いてしまいました。貴方、かりそめの慰め言葉は今更おっしゃらないでください。

288 早くも三年が経ちます。絵筆を燃やし、病み伏せていた私でした。その頃の悩みが今は懐かしく想い出されます。

289 お互いの手の平に書き交わした秘密の言葉。人に聞かれると余りにも恥ずかしいので、貴方、小さな声でお読みください。

290 白萩を吹き渡る夕風を袖に受けながら、涙をおふきになる貴女でした。

〔新潮〕第二号、明33・9

291 貴方の御手に触れたその日から続く、この胸の小琴の調べは、どう表現したらいいのでしょうか。言葉が見つかりません。

292 面を赤く顔を横にそむけて、「磯千鳥」の曲を夜ごとに吹いて

います、妻を恋い慕う若き島守が。

293 月の出るのを待ち構えるように戸口に立つ私の袖を引き、貴女は何を思っただろうとするの、と人は非難するのです。

294 折ってきた藤の小枝を川水につけましょう。しばし待つ間も注意を怠らない私でした。

〔父母をおもふ歌の中に〕

295 私は強いて涙を拭い微笑みました。この世は何と楽しいことでしょう、と髪には花を飾りました。

〔新潮〕第三号、明33・10

296 人の世でこのように隔たっていたとしても何も問題はありませんが、歌の神様の翼に私たち二人が乗っているのなら。

297 海原の真真中で權を投げ捨て、思い切り泣いてみたいものです、舟が沈みゆくまで。

298 父母が口づけして可愛がってくださいましたこの私の頬を、どうして濁った涙で汚すことが出来ましょうか。

299 神様、貴方の子である少女の涙を拭ってくださいませ。人の世の風を腹立たしく思っている私なのです。

300 浜寺の渚に立ち、打ち寄せる波の音に調和させた歌を作りたい、とひたすら私は思っています。

301 人の世の記憶に残るようなすばらしい歌々を読んだ私は、十二の星々をこの手に掴み取りたく思いました。

302 須磨の海辺で拾った真玉を大切に秘めて置きましたところ、そこに星の御歌が浮かんで現れたのです。

303 そのような素晴らしい歌を星の世界に伝えようと、天女も須磨の海辺を空高く飛んでいらっしやるでしょう。

「新星会詠草」〔大阪毎日新聞〕明33・9・18

304 貴方のきまりが悪いいたずら心に溢れたお手紙に私の胸は高鳴ってしまい、時々はその筆遣いが憎らしくなります。

305 もし萩の花が貴方の袖に触れたならば、その露は零れるでしょう。貴方、どうぞその露に心を掛けてくださいませ。

「新会星詠草」〔大阪毎日新聞〕明33・10・31

306 野原に出掛け、貴方の御歌を誦してみました。秋の七草たちはみな領き、その歌を愛でるのでした。

307 私もいずれ死ぬ定めです。取るに足らない私の歌反故も埋めた、そんな歌塚一つをこの世に残したいものです。

(2) 『恋衣』以後の『明星』掲載歌

「花がくれ」〔明星〕巳歳第二号、明38・2

308 貴方のもとに降りて来た高貴な天使の姿に感激する余り、私の翼に似た袖を振ってお迎えしたのでした。

309 貴方が窓辺で歌う唄を微かに聞きながら、磯山の花々に朝露が降りる中、私は臍を漕ぐのでした。

310 激しく流れる雲の色を見て、若々しい海人の瞳は燃えていた。それを咎めてはなりません。

311 私が息を吹いて暖めた玉のような梅の蕾。そればかりが一つ、灰かに匂い始めたのでした。

312 桃色の絹で目を押さえて私は見ないようにしました、この若草の路は思い出の多いところでしたので。

313 小鼓を拍っている私はとても春を謳歌する気持ちにはなれませんが。世の何を恋しく思っつて小鼓を拍てばいいのでしょうか。

314 何ものも疑わず恐れない貴方は、私のただ一人の理解者です。貴方のお命を私にください。その奥に私を住ませましょう。

315 一刻も早く抱き合っつて泣きたいものです、と胸に思いながら、互いに寂しい笑みを交わしながら行き過ぎるのでした。

316 桜の木の下でうたた寝をなさっている貴方、決してお目覚めなさいませぬ。貴方のご覧の夢を奪つて私は死にたいのです。

317 玉に刻印して秘した尊き思い出と瞳に焼き付けたあの光景とがあれば、私はそれで満ち足りています。

318 袖をかざし京の桜は見えないようにした。それからの私は紅をさしたり着飾つたりする喜びを知らずに年を取ったのでした。

319 私にとつて歌は命です。涙は命です。胸は激しい痛みを秘めて悶えていたのです。

「新詩社詠草」〔明星〕午歳第一号、明39・1
(都に病みてよめる拾首)

320 秘かに辞世の歌は書いてあります、病がいよいよつので来ましたので。

321 来世にも再び女として生まれて来たいものです。花も離れがた

く月も慕わしく思われますので。

322 私が幼い子供時分の心にかえったので、キリスト様は私をお救いなさいました。私は神様に抱かれて安眠しています。

323 現実でも夢の世界でも、今は苦しみの影は少しもありません。

私はいつも心安らかに過ごしています。

324 若い時は幸薄い我が身の不幸を嘆いたものでした。が、そんなことは取るに足らないことです、死を前にした今となっては。

325 すっかり衰えて、私は人の助けを借りて頭を起こしてもらい、かつて親しんでいた星々を病室の窓から見るのでした。

326 母の手紙は愛情あふれるものでした。これは神様が私に示した御心なので、それを頼りにしようと思っています。

327 戸に吹きつける風も病に伏す私のつく息も穏やかです。この場合を盗み、しばし恋の話でもしましょうか。

328 窓に差し込む黄金色の夕焼けも見ることができず、病がつつた私は額に氷をして横たわるのでした。

329 木枯に吹き飛ばされず、吹き墮とされるような、そんな葉っぱの心地です。疲れは増します、木枯が吹くに従って。

330 お見舞いの百合が花輪となって私の枕辺を慰めている、とお思いいなってください。私の心は清く穏やかです。

「新詩社詠草」〔明星〕午歳第五号、明39・5

331 桜が散る音と胸の鼓動とが冷たく聞こえます、涙が訳もなく落ちるそんな日は。

332 憂きことが胸に入るたびに、私の若き血はだんだん枯れていき

ます。私の将来は何と空しいものでしょうか。

333 道幅の狭いところに行き着いてしまいました。この道のない崖伝いを歩むのは、獅子に追われている心地がするものです。

334 溢れ出る涙を堰き止めようとして築いた胸の堤にも、恋の花が咲きました。

335 野ネズミの隠れ家を尋ねて野に行きましよう。私も野ネズミのように過度に人間を怖れる者なのです。

336 種は既に蒔きました。それが天界で花と咲き誇り、その樹影の下を貴方とともに歩む日はあるのでしょうか。

337 申し訳なきで一杯です。貴女の麗しい頬に涙をお流せしてしまいました、私の病のゆえに。

338 花の香りで満ち溢れた常世の島に船を浮かべ、心から笑う日があつて欲しいものです。その島で私は貴方をお待ちします。

339 いとおしい恋、とて秘して忍んでいます、貴方にお会いすると自然に涙が溢れてきます。貴方、どうしてくださいますか。

340 私は自分を守る盾として歌を詠んで来ましたが、歌の出来ない日は悲しく、何に身を隠したらいいのでしょうか。

341 私の悩みごとは小さな二葉のようなものとみていましたのに、いつの間にか大木となり日を覆うばかりになってしまいました。

342 かくかくにして死を迎えるべきです、と人は有り難くもおっしゃいます。瘦せるほど泣き続けた日は私を褒め称えるのです。

343 波に揺れ漂い、疲れ果ててやつのことで灯台の光を見出しませんでした。貴方の許に赴く時のことでした。

344 紅い甘藍の芽を啜えた白バトは、優しい眼をして神社に帰りま
した。

345 水面の微かな波紋にも、藻の花は二方に揺れて分かれるのでし
た。

346 鶏の雄と雌とが並んでつくばい、外の雪景色を眺めていました、
輪飾りをした土間の石白の上から。

347 藁靴と草双紙が並んで干してある、二月の陽がさす縁側。その
縁側の傍らには紅梅の花が咲いていました。

348 薄色の椿の花は、まるで初めて京島田を結って、とつても重い
わ、と恥ずかしがっている少女の趣きがあります。

349 白珠にかよう数珠屋町とはどこにあるのでしょうか。中京を越え
た辺りで人に尋ねてみようかしら。

350 希望のない日々を送っている私は月日の移り変わりなど関知し
ない。人々がおめでとう、と言うので私も新年を祝うだけです。

351 ずっと私の身体は病み続けるのでしょうか。私は少しも悲しむこ
となく、冷え冷えとした心を懐いたまま朽ち果てましょう。

352 私を招く死神の姿でしょうか、黒谷の寺々の鐘が響き渡る中、
暮れゆく山の端から湧き上がっているあの黒雲は。

353 私には強い思いが一つあります。神様、その思いを受け取って
ください。私は燃え盛る火の中を是非とも走りたいのです。

354 病に倒れたその肉体が痛い、と人は言います。しかし私は何よ
りも悲しみのために心が、心が張り裂けたのです。

355 加茂川の岸で私は泣きました。誰が知っているでしょうか、そ
の岸の真白き石が私の流した涙の結晶したものであることを。

356 長路の歩みで熱くなりすっかり渴き切った馬でしたので、水に
向かって行くのではないかと、私の心は烈しく動揺しました。

357 紅の蝶の匂いに依然として似たところがある、心に秘めたまま
で年月がたった、この私の恋心は。

358 幕間の空き時間に、踊り子が少し伏し目がちに紅をさし、襟を
繕いました。私はそれを大変好ましものと見たのです。

359 泣けばしみじみとした感慨で心が満ち足りてきます、慰められ
ます。今は涙だけが私にとって優しいものなのです。

360 空に立つ虹のように麗しいものでした。私の知らない不思議な
ものだ、と人は言いました。だから直ぐに消えました。

361 古琴の弦にもう比叡下ろしが当たっているのが見てとれます。
そんな寒い日に私は髪を乱したままでいたのです。

362 私には果たして有るでしょうか、母鳥を求めて鳴く小雀女が二
尺ばかりの空中を必死で飛ぶ、そんな誇らしげな心すらも。

363 椿が咲いている林の朝は冷たく澄んでいます。八瀬の川岸には
垂氷が下がり、水車が音を立てて回っています。

364 遠いところへ行つて私は穏やかな心をいつくしみましょう。物
を売る騒がしい人々の声が聞こえない、そんなかなたへ。

365 私が亡くなる日にも今日のように雪が降って欲しい。京の山々
は白雪で深く覆われ、黒谷の塔も雪中にすつくと立っています。

- 366 我が家の南側、若芽が芽吹いた枳殻の高藪には霞がけむり、鶯が鳴いています。
- 367 私が病んで宵寝をしている寢床に、川を越えて花の香りを振りまきながら知恩院の鐘が届いて来ます。
- 368 川向こうにいる、小傘の中の片方は紅い帯を締めている。二人の傘に柔らかな春の雨が降っています。
- 369 春の風が、海に育った玉藻のようなたわたわの、私の起きかけの髪を吹きゆすります。
- 370 私は若緑で萌える春の野で、四葉のクローバーを見つけました。そのクローバーにこの上ない貴女の幸せを祈りましょう。
- 「新詩社詠草」〔明星〕未歳第五号、明40・5
(西の京に病みて)
- 371 救いに来てくださった御船を目の前にして、私は海に墜ちてしまいました。汗びっしょりになって夢から覚めたのでした。
- 372 すっかり衰えた私を早くも弔おうとするかのように、隙間洩る夜の寒風が、泣くように私の髪を吹くのでした。
- 373 静寂な病の床に伏せっている、嘘偽りのないこの私なるもの、これこそが神の姿である、と知ったのでした。
- 374 ほんやりと黒い影を引いて私の枕元に来て座っているあの世からの使い。それが私に熱い息を吹きかけます。
- 375 花が咲き匂う山里に病んで寝ている私。遠くから微かに聞こえてくる都の寺の鐘の音を数えては気を紛らわせています。
- 376 あの石にも花が咲くようではないか。私は病がつのり何もできないが、この世に対する愛惜の念は限りがないものなのです。
- 377 美しい蛾が哀れにも迷い込んで来ました、僅かな匂いがする消えそうな灯りの許に。
- 378 行くべきでしょうか。オロチが黒い谷間の陰から恋しい母の声をさせて私を呼んでいます。
- 379 比叡山や愛宕山が薄紫の山頂を見せ、その底に横たわる京の町々が朝霧に濡れています。
- 380 春雨がしとしと降り、加茂の河原に千鳥が鳴く中、傘を差して私は美しい石をあれこれと選んでいます。
- 「新詩社詠草」〔明星〕未歳第六号、明治40・6
- 381 どちらへか遠くに行こうとしている聖様。どうぞ幾億里離れた彼方から左京を指さし、私の進むべき路を作ってくださいませ。
- 382 何か変化のものが来て私の髪を乱しました。大変重い鉛の冠を置いていったかのように、その重さに私は苦しみ悶えました。
- 383 藤の花が山を着飾っていく晩春の、お寺の鐘が鳴り渡る青い空。そんな空に私は消えていってしまいたい。
- 384 今残されたこの半生こそ、あらゆる私を葬るために数々の墓穴を掘り続ける日々なのです。
- 385 重い石を背負って山路を難儀して登り行く心地がします。びっしょりと冷たい汗をかきました、夜中に病状がつのりましたので。
- 386 目をはっきり開くための不思議なお薬を飲ませて頂いたのでしょうか。今日は全てのものが美しく見えます。
- 387 五月には、花菖蒲や葵の葉などいろいろと取り束ね、それを病

んで寝ている私の枕にしたのでした。

388 私は馬の綱を執りましょう。貴方は鞭を当ててください。二人を乗せた逸楽の馬はいななきました、蜜の雫の上に。

389 貴方は来ます、炎の波をかくぐり、今にも沈みそうな真白き百合を浮き木として。

390 灰色の暗い空から雪が降ってきました、私が焚く細々とした野火を消そうとして。

391 私の流した涙は夕方に降る山の雨となり、ウグイスに降り、散りゆく花に降るのでした。

392 アヤメが一夜のうちに咲きました。その花が早くも五月雨に濡れています。

「雪の日」〔明星〕申歳第四号、明41・4

（父君の喪にこもりて）

393 息をのみ涙を流すのも忘れて夢の中の父上を見ていました、と母に語りましょう。早く覚めてしまいたい、この悲しみから。

394 父上よ、天上でどうぞお待ちください。この私をも神はお招きになります。共に天国に行きましょう。

395 神様をお祀りするよりも哀しく慕わしく思われる。青檜の柩に白木綿を掛けて清々しく父上をお祀りすれば。

396 私の胸も白木そのものです、どうぞ私を父上の柩に打ち付けてください。父上の柩を閉じる石の音が真夜中に響いて来ます。

397 父上の柩を担ぐ白い衣の人足達が藁靴を履き終わった。焼場に向かう父上の柩を、私はどう止めることができましょうか。

398 父上の墓のある山を埋めるように雪が降って来ます。篝火を百も千をも持たせてどうにか父上の墓を雪から守りたいのです。

399 氷柱が下がる寒い夜の谷で、私が声を泣き潤らしながら父上を呼んだなら、微かでも父上の声を聞くことが出来るでしょうか。

400 鉄の斧の嘴を持つ夜鳥よ。その嘴で陰府の戸を砕いておくれ。私は父上をそこから奪い取り戻って来たいのです。

401 たとえ国の境で凍え死ぬことがあっても、鉦を叩き、何度でも何度でもそこに父上の霊を尋ねて行くつもりです。

402 何と病の熱は頼りがいがあるものか。熱の中、夢で父上を仄見ながらというもの、いつも魔されながら父上を呼んでいます。

（故玉野花子の君に捧げまつる）

403 真夏に咲くヒマワリの花に包まれて生まれてきた貴女。今その貴女を失い、私は悲しみの涙を流しています。

404 ある夏の日、貴女とは京都鴨川のほとりでお別れました。そこで再び貴女をお見かけすることが出来なくなってしまうとは。

405 はつきりと今は天空に貴女を見ることが出来ます。貴女はハンカチを振り、太陽を指さしていらつしやいます。

406 ゆらゆらと消え入りそうな蠟燭の火が微かに匂っています。何ともうら悲しいものです。

407 このように命を長らえることは寂しく辛いことです。いつそ千斤の鎖に絡まり海の底に沈みたいものです。

408 日頃から私の胸を叩き、死ねよとさいなむ嘴太カラス、その鉛

色の鳥々が空全体を覆い始めました。

409 海に投げ捨てました、はかないこの世に生きた私の夢の切れ切れを。それらは腐った色をして流れて行きました。

410 オットセイが氷の上で眠ることの幸せ、私も今はそれを理解することができません。面白いものですね。

「日蔭草」(『明星』申歳第五号、明41・5)

411 土の底に穴を掘って暮らして居る心地がして、私は陽を見ることもありません。寂しいのです、父上はいらっしゃらないのです。

412 ほんの一目、ぼんやりとしたお姿でもいいからお見かけしたい、と私は暗い夜を尋ね歩くのです。

413 死の国へ至る道を照らすという天の火を喰って、白銀の鳶よ、雲井から父上をお迎えして来ておくれ。

414 死の神の御手へ、大変心安らかな気持ちで私の身を委ねるのでした、心を潤して涙があふれる時には。

415 どうぞ私を墮としてください、永久に寒々しい幽界の底へと。そうされても私はその偽りの恋は守り通すつもりです。

416 若い身でこんな嘆きの中で世を去ろうとは、思いもしないで日々を送っていました。そんな日々も遠くなってしまうました。

417 後世はもとより現世の幸せすらもう願ひはしません。そんな私の胸の上に桜の花が散ってきます。

418 閉じる目に、鼓の音を響かせて渦巻きます、悔いと呪いと嘲りの色々が。

419 悲しみの中に生きてきた者たちが、手を取り合って行く鳥。そ

んな鳥が果たしてあるのでしようか、わたつみの果てに。

420 生きている気がしない闇の境で、私は静かな微かな光を頼みとしたのでした。

421 温かく心臓を巡る血の流れが静かになる時があります。とぎれとぎれに鼓動がします。

422 泣かない日は寂しく、泣ける日は少し楽しいものです。この虚ろな私の身に、涙よ、あふれ出しておくれ。

423 矢のごとく地獄に墮ちる躰の石とも知らず、私はそれを何気なく捨ててしまったのでした。

424 付き添ってくれる人もない私の柩が行く野辺は、寂しさが際立ちました。霞が棚引いています。

注① 「山川登美子の歌(1)―『白百合』全釈」(『福井大学教育地域科学部紀要第I部人文社会(国語学・国文学・中国学編)』、平19・12)

「山川登美子の歌(2)―『恋衣』拾遺・『明星』掲載歌」(『福井大学言語文化学会編『国語国文学』第四十八号、平21・3)

注② 釈道空「女流の歌を閉塞したもの」(『短歌研究』、昭26・1)